

# 学校・家庭・地域との相互連携による自己有用感の育成

愛知県立一宮北高等学校教諭 佐治 高志

## 1 はじめに

本校は一宮市北部に位置し、木曾三川の一つである木曾川が近くに流れ、遙かには日本アルプスや御岳を望み、壮大な自然を日々感じながらおおらかに生活できる環境にある。また、地元の中学校出身の生徒が多く、日頃から生徒に対する保護者の関心も高い。

昨年度、センターによる実態調査を実施し、その結果と本校生徒のみの結果に差がみられた質問項目を抜粋したものが資料1である。その結果、「私は困難にあっても、粘り強くがんばることができる」、「難しいことでも失敗を恐れず挑戦している」という忍耐力やチャレンジ精神、「うそをつくことはいけないことである」という正直さについて、肯定的に回答した生徒の割合は、県全体の割合よりも高かった。しかし、「私は人の役に立っている」という自己有用感、「よいことをして身近な人にほめられる」経験について、肯定的な回答をした生徒の割合は、県全体より低かった。

【資料1 調査項目について、「当てはまる」と答えた生徒の割合】

調査項目	愛知県	本校
19 私は困難にあっても、粘り強く頑張ることができる	53.9%	57.9%
36 難しいことでも失敗を恐れず挑戦している	52.0%	55.8%
40 うそをつくことはいけないことである	86.1%	89.4%
17 私は人の役に立っている	43.4%	41.7%
21 よいことをして身近な人(親・先生)にほめられる	60.0%	57.4%

そこで、本校が実施する地域社会に貢献する活動を活用することで、本校生徒の豊かな人間性を育みたいと考え、本実践を行った。

## 2 手だて

地域社会に貢献する活動として、本校が年1回実施する「地域交流スポーツカルチャーバイキング」を取り上げることにした。この活動は、学校近隣の小学生と本校生徒がスポーツや文化活動を通して交流を深め、お互いにスポーツや文化活動の楽しさやルールを守ることなどの大切さを学ぶ交流活動である。

生徒には、活動の計画段階から自分に何ができるかを考えさせ、各部及び部員に運営・指導を任せることにより、自発的に体験する機会を設けることにした。また、活動中や活動後には、自分が役に立てたことを実感したり、活動についての周囲の評価も得られたりできるようにした。

## 3 実践の内容

### (1) 平成26年度の活動について

本校の周年行事として、「地域交流スポーツカルチャーバイキング」を実施した。事前に学校近隣の小学校(3校)や、サッカークラブなどに通う小学5・6年生に行事の実施を伝え、参加を募った。

生徒には、事前に各部活の主将や部長を対象にリーダー講習会を実施し、活動の意義や趣旨・目的を説明した（資料2）。そして、各部で相談し、実施する内容や担当者などを決めさせた（資料3）。また、生徒の変容を捉えるために、事前・事後アンケートも実施した（資料4）。

【資料2 リーダー講習会で生徒に伝えた主な内容】

- ・小学生が最初に感じる一宮北高校の印象について  
(子どもと一緒に動き, 自らも楽しむ)
- ・出会い・興奮・感動・憧れ・将来につながる出会いとするために  
(笑顔で活動・オープンマインド・コミュニケーションスキルの必要性・達成感)
- ・子どもたちへの接し方について  
(わかりやすい言葉で・子ども目線で)
- ・非常時(けが等)の対応について  
(素早く適切に・寄り添い引率)
- ・トレーニングメニュー(運動部)・体験内容(文化部)について  
(ルールをはっきり・色分け)
- ・他者へのリスペクトの精神  
(自分の大切なものを大切に思ってもらう)

【資料3 参加部活動及び日程, 実施内容(一部抜粋)】

	①13:00~13:45	②14:00~14:45	③15:00~15:45	実施内容
グラウンド	サッカー	サッカー	サッカー	個別指導等
	陸上	陸上	陸上	種目別練習
	ソフト	ソフト	ソフト	ゲーム
	ドッチボール	ドッチボール	ドッチボール	ゲーム
体育館	バレー	バスケット	バスケット	簡易ゲーム等
テニスコート	硬式テニス	ソフトテニス	硬式テニス	基本動作・簡易ゲーム等
ハンドコート	ハンド	ハンド	ハンド	簡易ゲーム等
弓道場	弓道		弓道	至近距離から射
中庭	和太鼓	和太鼓	和太鼓	基本動作等
音楽室	吹奏楽	吹奏楽	吹奏楽	楽器体験・演奏
調理室	調理製菓			お菓子作り

【資料4 事前・事後アンケート】

- ＜事前アンケート＞
- ・小学生との交流経験の有無
  - ・今回の交流は楽しみか
  - ・今回の交流で地域に貢献したいか
- ＜事後アンケート＞
- ・今回の交流で、何か得たものはあるか
  - ・今回の交流は楽しかったか
  - ・機会があれば、また参加したいか
  - ・今回の交流で、少しでも地域に貢献できたと思うか

当日は、250名の小学生と多くの保護者が参加した。そして、16の運動部と文化部に所属する320名の生徒が屋内外にブースを設置し、参加した小学生は興味のある場所に行き、高校生からさまざまなことを教わり、職員・生徒が一丸となり学校を挙げて行われた（写真1）。

【写真1 地域交流スポーツカルチャーバイキングの様子】



＜開会式の様子＞



＜茶華道部の様子＞



＜弓道部の様子＞



＜バスケット部の様子＞



＜ソフト部の様子＞



＜保護者等の様子＞

事前アンケートにおいて、小学生との交流経験の有無について、「有り」と答えた生徒は約2割であり、その機会は「地域のスポーツ少年団」「町内運動会」「学校での交流活動」「ボランティア活動」等、限られたものであった（資料5）。そこで、各部が企画をする際には、交流経験がある生徒のアドバイスを参考にしたり、リーダー講習会の内容を取り入れたりしていた。そして、各部独自の発想で、部活動の楽しさをどのように伝えるかを話し合う姿が見られた。

当日は、自分が小学生だった頃を思い出しながら、小学生の言動にあわせ、教え方や言葉遣い、発達段階に適した内容であるかなど、試行錯誤をしながら交流している様子が見られた。

また、地域交流に対する意識については、資料6の事前アンケートで「地域交流に貢献したいか」と尋ねたところ、61.5%の生徒が「はい」と答え、その理由は、「一宮北高校を知ってもらうチャンス」「地域の方々を大切にしたい」「一宮北は地域に支えられているから」「地域に恩返ししたい」「人に喜んでほしい」「地域と高校の関係を円滑にしたい」等であった。

そして、資料6の事後アンケートで「地域交流に貢献できたか」と尋ねたところ、57.0%

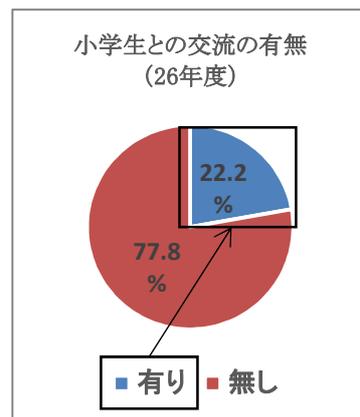
の生徒が「はい」と答え、その理由は「学校の様子を少しでも知ってもらえた」「地域の子どもたちが笑顔で帰ってくれた」「保護者も多数来ていた」「保護者と会話する機会があった」「小学生が楽しんでくれた」「地域の小学生とふれあうことができた」「部活の様子を知ってもらえた」「将来、一宮北に来たいと言っていた小学生がいた」等が書かれていた。一方、8.6%の生徒が「いいえ」と答え、その理由として「よくわからない」「遊んだだけ」「地域交流をした感じがなかった」「地域のことがわからない」「こんなことではまだまだ足りない」「自分たちの力でもう少しできることがあるかもしれない」「地域行事に貢献できることは、これからもあると思うから」等、否定的な意見もあった。しかし、高い意識の中で課題を感じた結果、「いいえ」と答えた生徒がいることもわかったので、これらの課題に対して生徒自身で解決の方策を見つけることができるよう、教員が生徒を支援していく必要もあることがわかった。

また、「どちらでもない」と答えた生徒の理由には、「自分たちが教えることはできたけど、それで楽しんでもらえたかわからない」「感想を聞いていないから」「この行事が地域交流につながるかわからない」等が書かれていたので、この地域交流の目的が生徒一人一人に周知徹底されていなかったことや、小学生や保護者からの思いや言葉が生徒に届いていなかったことが課題であると感じた。

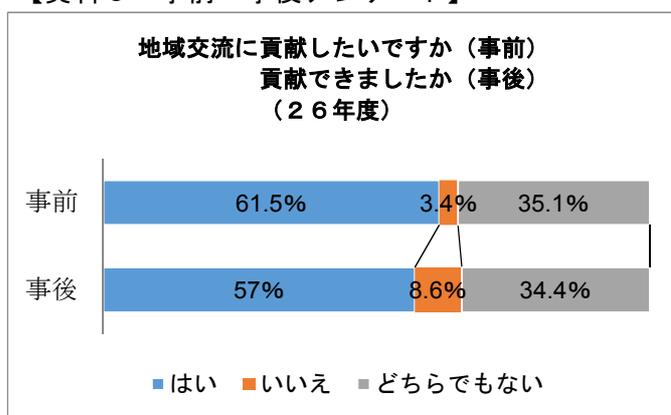
## (2) 平成27年度の活動について

平成27年度の活動計画では、平成26年度に挙げられた課題が解決できるよう、事前のリーダー講習会を通してこの活動の目的が参加する生徒全員に伝わるよう呼びかけ、行事当日には生徒一人一人が目的意識をもって活動に取り組めるようにした。また、小学生や保護者に対してアンケートを実施

【資料5 事前アンケート】



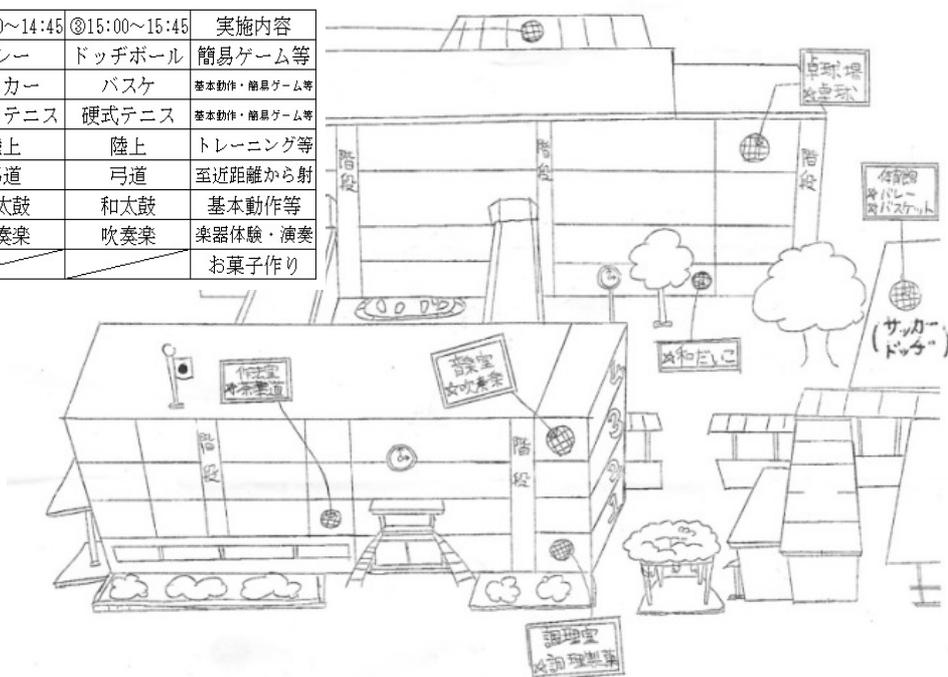
【資料6 事前・事後アンケート】



し、その結果を事後のリーダー講習会等で共有し、振り返りの機会を設けられるようにした。27年度は雨天であったため、26年度に比べると参加した小学生の数は少なかったが、それでも150名の高校生が活動に参加し、小学生と保護者あわせて250名が参加した。そして、12の運動部と文化部が屋内にブースを設置し、参加した小学生は興味のある場所に行き、高校生からさまざまなことを教わり、職員・生徒が一丸となり学校を挙げて行われた（資料7，写真2）。

【資料7 参加部活動及び日程，実施内容，活動地図（一部抜粋）】

	①13:00～13:45	②14:00～14:45	③15:00～15:45	実施内容
体育館	バレー	バレー	ドッジボール	簡易ゲーム等
体育館東	バスケット	サッカー	バスケ	基本動作・簡易ゲーム等
武道場	硬式テニス	ソフトテニス	硬式テニス	基本動作・簡易ゲーム等
渡り廊下	陸上	陸上	陸上	トレーニング等
弓道場	弓道	弓道	弓道	至近距離から射
中庭	和太鼓	和太鼓	和太鼓	基本動作等
音楽室	吹奏楽	吹奏楽	吹奏楽	楽器体験・演奏
調理室	調理製菓			お菓子作り



【写真2】（27年度・雨天時）



＜開会式の様子＞



＜テニス部の様子＞



＜卓球部の様子＞



＜サッカー部の様子＞



＜調理製菓部の様子＞

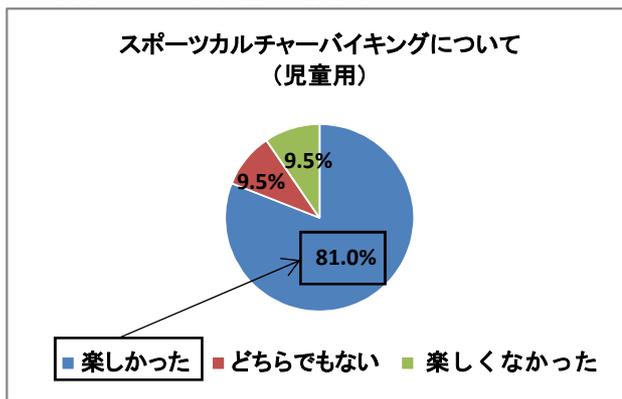


＜保護者の様子＞

資料8は、参加した小学生の感想である。約8割の小学生が「楽しかった」と答え、その理由を聞くと、「初めて弓道をするのができて楽しかった」「高校のお兄さんに勝ってうれしかった」「楽器の使い方をわかりやすく教えてくれた」「ボールに触れてよかった」「みんなと楽しくできた」「またやりたい」等があった。

また、参加した小学生の保護者にも感想を聞くことができた。保護者からは、「習っている種目以外にも、今日はいろいろなスポーツ体験ができるので楽しみにしていた」「高校生が教えてくれるので、安心して見ていられる」「このような機会はあまり聞かないのでありがたい」という声が聞かれた。

【資料8 小学生の感想】

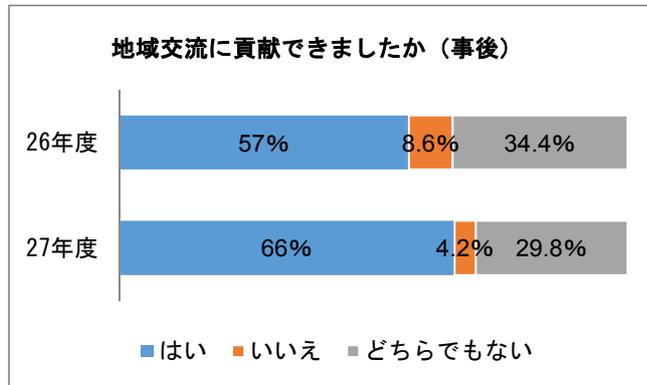
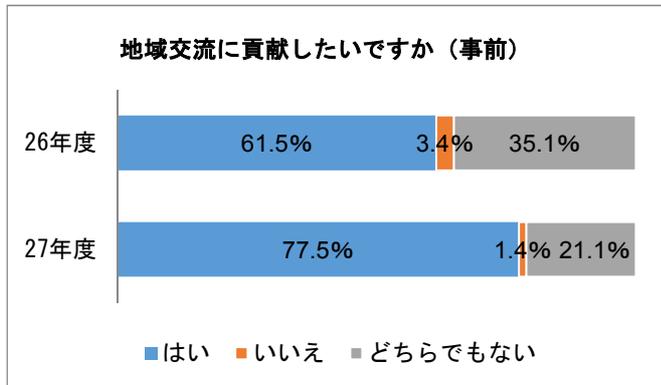


「このように機会はあまり聞かないのでありがたい」という声が聞かれた。

(3) アンケート結果の比較について

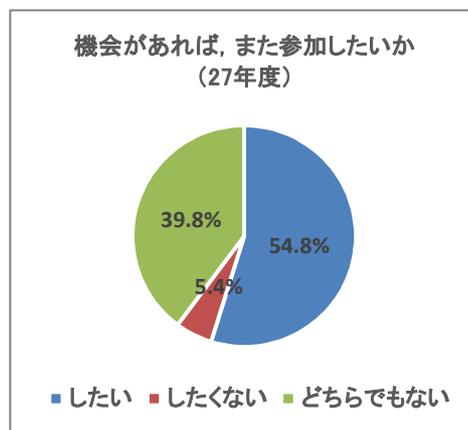
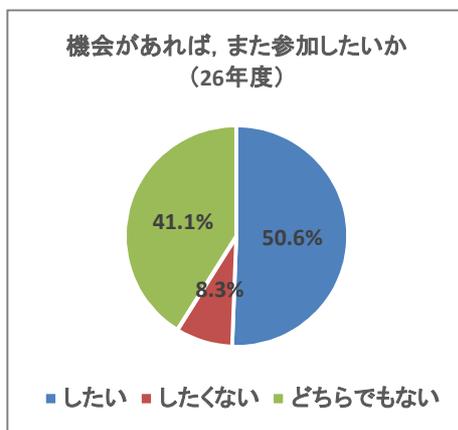
資料9は、地域交流活動に貢献することについて、平成26年度と平成27年度のアンケート結果を比較したものである。平成26年度に比べ、平成27年度は地域交流に「貢献したい」と答えた生徒の割合が高くなった。これは、事前のリーダー講習会で、この活動の目的を参加する生徒一人一人がよく理解し、意欲が高まったためであることが考えられる。また、雨天のために活動内容に制約があったにもかかわらず、「貢献できた」と答えた生徒の割合も高くなり、昨年度の課題も生かしながら自発的な活動を行ったことで、貢献できたと感じた生徒が増えたと考えられる。

【資料9 地域交流活動に貢献することへのアンケート結果の比較】



また、事後アンケートでは、「機会があれば、また参加したいか」とも尋ねており、その結果が資料10である。5割以上の生徒が参加意欲を示し、その割合は27年度のほうが高くなっている。記述にも、「また違う企画をしたい」「疲れたけど違

【資料10 地域貢献活動への意欲についての比較】



成感があった」「学ぶことが多かった」「自分にとってよい経験になる」など、前向きな意見が多かった。事後アンケートを実施するだけでなく、事後のリーダー講習会等を実施し、振り返りの機会を設け、そこで出てきた問題点や反省点を教員と生徒が共有し、改善することで、よりいっそう自己有用感を感じたり、地域貢献活動に意欲的な生徒が増えたりするのではないかと感じた。

#### 4 実践のまとめ

地域交流スポーツカルチャーバイキングでは、部員一人一人が責任を持ち、部員同士が同じ課題に向けて協力して運営・指導を行ったことにより、終了後は多くの生徒が達成感にあふれていた。自発的に活動する機会を通して他者と関わり、自己有用感を高めることができたと考える。

しかし、部によって感じ方、受け止め方が大きく異なった。ものをつくる喜びをともに味わうことのできた調理製菓部や日頃から積極的に交流を行っているサッカー部等は活動に対して積極的・肯定的であったのに対し、季節柄、プールが使用できず、他の部の手伝いや案内役だった水泳部は消極的・否定的であり、施設に関する課題を克服することが難しかった。

当初は周年記念としての行事であったが、参加した小学生や保護者及び地域の人からの評判が良好であり、27年度も実施した。そのことで、生徒自身が問題点や反省点を振り返り、共有し、皆で協力して企画内容を見直すことができた。このように、失敗から学び、自ら考え実行し、克服する体験を通して、生徒は更に自己有用感を高めることができることが、本実践を通して明らかとなった。そして、地域の人が本校を身近に感じ、生徒を信頼してくれていることを、生徒自身が実感できる環境づくりが大切であると、教師たちも実感した。

#### 5 おわりに

教育の場において「学校・家庭・地域の相互連携」が提唱されてから久しい。学校で行われていることを、あるいは学校が意図することを、家庭・地域に発信して知ってもらうことは容易ではない。

「学校・家庭・地域の相互連携」を確立させるためには、さまざまな手だてを活用し、生徒の成長を促す働きかけを継続的に行い、成長過程やその成果・結果を評価することが必要である。そしてただ評価するだけではなく、個々の評価に基づいた継続的な働きかけにより、生徒自身の物事に対する考え方に変化が現れる。考え方に変化が現れ始めた初期段階において、更に適切な働きかけや言葉がけをすることにより、発達段階に合った社会性や自主性・自立心が育ち、自己有用感につながる可能性が高いと思われる。

自己有用感を持つ生徒は、前向きに物事をとらえることができ、考え方や発言も肯定的である。そして、その生徒の家庭も学校に対して協力的になり、「学校・家庭」の連携が形成される。そして、家庭が他の家庭や地域へ学校の情報を発信し、周辺地域に学校の情報が浸透することにより「学校・家庭・地域の相互連携」が形成されるのではないかと。学校の情報が一人の生徒から地域に伝わるまでには時間を要するが、地域に浸透してこそ、「学校・家庭・地域の相互連携」が確立できると考える。

小・中・高の各発達段階で、その年齢の児童生徒に携わる我々教員が、各学校における「学校・家庭・地域の相互連携」の在り方、各学校における「体験的な学習活動の場の保障」の在り方をよりいっそう吟味し、児童生徒に豊かな人間性を育む必要があると考える。